

かれらが実習を行った期間の問題もある。コロナの状況が災いしたという点は、Sの言葉からうかがえる。

「コロナ禍に入ってから、民間企業に興味を持ち始めたんですけど、僕自身が思っていた学校のイメージ、会話がたくさんあったりだとか、給食中とか休み時間とかもたくさん会話が飛び交っているような学校の姿って、理想の姿っていうものから少しかけ離れているっていうところから、理想と現実のギャップが生まれてしまい、その間に、ギャップがどんどん埋まっていく間に、また元の姿に戻っていく間に、私自身の中で何か教員以外で他のことを経験してみようと思ったのがきっかけにはなります。コロナ禍になって、ほぼほぼ授業がオンライン化に進んでいって、あとはニュースで、学校のブラックの現状というものを見るようになって、私自身の、楽しくワイワイすごしている理想と、何事も寡黙に密じゃなくやっている学校現場の理想と現実のギャップが生まれてしまって、私自身の中でちょっと、学校の先生に『今なるのは違うな』という思いが芽生えてきました。」

以上のように、教育実習の経験がかれらの意識を大きく揺さぶっていることを見てとれる。しかもほとんどはネガティブな方向に…である。これは、教育実習先の問題でもなければ、ましてや実習生が責任を負うべきものでもない。実習先からすれば、教育実習を受け入れる際に、おそらくありのままの仕事ぶりを見せ、かれらにもその現実を知ってもらった上で教職の道を選択してほしいという至極まっとうな判断をしているのであろう。綺麗に取り繕うことの方がはるかに罪深い。「ありのまま」がかれらの動機づけになるよりも、クールダウンさせるきっかけにしかなくなっていることがまさに「教職の危機」そのものを表しているものであり、この現実を私たちは真剣に受け止めなければならない。

### ③環境・条件の問題を自身の実体化された能力・適性に帰する思考傾向

小学校と中高の教育実習をともに経験する場合、ほとんどの場合小学校から中高へと志望を変化させる。とくに、「自分に合うのは中学校だとわかった」という語りが数多く見られた。部活動を土日担当することがないとすれば、おそらく通常の勤務実態よりも中学校の教育実習は軽い負担として映るのかもしれない。それだけでなく、「こちら側の言葉が通じやすい…」という面もかれらの語りから読み取ることができた。たとえば、Hは以下のように語っている。

「でも、なんか中学高校の方が向いてるなって思ったのが、教材研究して子どもたちの反応が返ってくるのが面白いってところが大きいので、とことん教材研究をする時間があったりとか、授業について構成練ったりとかっていうところがで